

HAARP(高周波オ-ロラ活性探索計画)は**触媒反応地震兵器**だが、天候兵器にはならない。
そのエネルギー量を比較すれば一発で了解できる。.....2014/10/13

際どい議論では尾ひれが突くと一度で信用崩壊!!、科学的正確さが不可欠だ!!!。
結論から言えば HAARP は通常送信装置としては破格大出力(3600Kw= 3.6×10^3 W)だが、
<http://oujuju.blog114.fc2.com/blog-category-11.html>

[1]: 台風や地震エネルギーその物に比較すれば HAARP は無視桁違いに小さい。
東京の放送局が 100Kw 程度、すると HAARP は 36 倍だからたいした事ないです。

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1234622157

台風エネルギー= 5.2×10^{19} Joule/day $\sim 1.8 \times 10^{20}$ J/day= 6×10^{14} W $\sim 12 \times 10^{14}$ W.

<http://www.aoml.noaa.gov/hrd/tcfaq/D7.html>

地震エネルギー M9= 2.0×10^{19} J/地震継続時間(数十秒, 数分)

<http://www.jclahr.com/alaska/aeic/magnitude/energy.txt>

HARRP に関わる公開特許文書があるが、それが天候兵器証明でもなかろう。筆者の場合、
Eastland の特許は理解できなかった。ならばなぜ地震兵器特許文書がないのか？。

[2]: 触媒解離反応<触媒には逆の結合促進反応も可能>。

(1)物資変化はすべて化学結合離反反応です、機械的破断や粉碎も化学結合が切れるから。
通常はエネルギー印加=温度上昇で解離も結合も反応加速します。

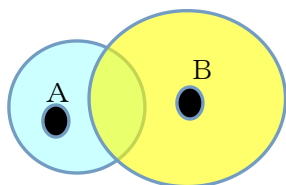
化学結合は原子核の+電荷とその周囲の電子雲(-)電荷間の**静電引力斥力**に拠ってます。
原子間の斥力が強いと結合反応はおき難い、その斥力ヲ弱めるのが触媒環境の存在です。
原子間の引力が強いと分離反応はおき難い、その引力ヲ弱めるのが触媒環境の存在です。
以上を触媒の**反応障壁緩和作用**と言う。注目はエネルギー作用ではない事です。

電荷密度空間<典型が**電子濃度が濃い稀金属表面**>はよい触媒空間になります。

<http://www.777true.net/Real-Image-of-quantum-Chemical-Reaction.pdf>

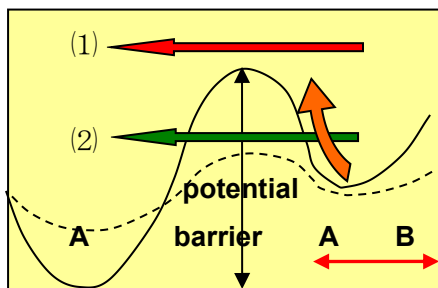
<http://www.777true.net/Brown-Gas-the-mechanism-of-the-obscurity.pdf>

(2)触媒作用による解離反応:



粗い話として左図で元素AとBが化学結合状態にあるのは原子核AとBは共に正電荷で反発力にあるのだが、その周囲を囲む電子雲は負電荷にあり、ABの重なり部分=緑色がAB原子核の反発力を消す作用=A Bを結合させる引力源になってる<共有結合、イオン結合>。

要は分子化学結合安定性=化学結合力(反応障壁)は電子と原子核の電荷配置の量子力学で決まる。したがって外部からこの電荷配置に影響を与える存在=触媒が持ち込まれると以前の化学結合力を弱める作用に働く。触媒実例は金属表面の高濃度電子密度空間である、



初めに B と A の結合位置にあった物を解離するには(1)名原子に熱運動量を与えて反応障壁の山(実線)を越える方法と(2)反応障壁の山を触媒導入で下げる(破線)2つの方法がある。

もう一つの触媒実例は電荷密度波である、之は電荷密度空間の波動伝播その物、之が化学物質結合空間に侵入すれば、必然的に化学結合減衰に働く。

更に一つの触媒実例は Brown gas 燃焼空間である、これはイオン電荷密度空間?、之が化学物質結合空間に侵入すれば、必然的に化学結合減衰に働く<切断、溶接>。生化学反応は酵素触媒で支配されると言う。

触媒反応はエネルギー消費せずして、化学反応促進に働くのだから一見魔法に見える。その典型が Brown gas の低温金属切断と HAARP 地震誘導であろう。地震が触媒化学に起因とは確かにわかり図らい。

[3]: HAARP地震兵器は多段階過程での触媒反応。

筆者がこの件で完全理解にある訳ではないです。概論推定。

<http://www.777true.net/HAARP-the-Earthquake-Weapon-Mechanism.pdf>

HAARP その物は横波電磁波 A の位相整列アンテナによる VHF 送信-放射機。

□ $A = -\mu j$. <A波は電流密度 j 駆動で放射される波動方程式>

之を所定の電離層に向けて放射し、電離層の局所電荷 q を振動駆動する。

すると電荷振動は縦波電荷密度波(スカラー波) ϕ を地上側に逆放射する事ができる。

□ $\phi = -q / \epsilon$.

この電荷密度波が地震層震源部にある臨界値以上の強度で焦点照射すれば、化学結合破断=震源破壊になる。地震トリガーになる。震源位置は事前に判る訳でない事に注意。

*横波電磁波と異なり、電荷密度波は海水も地中も減衰無く伝播する、之が特徴!!!。

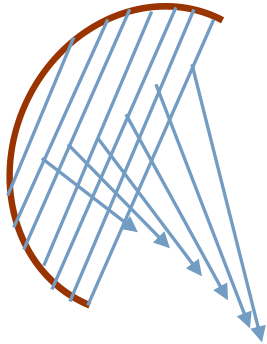
□ $B = (ic)^{-1} \partial_{\mu} j_{\mu}$. <B波は本質的に ϕ と同一、なんと電流保存法則の破れから放射>

**お化け水道、延々と湧き出る水道、実は視点垂直方向向きのポンプで循環。

”見えない電流成分<量子非可観測量>” = 電荷密度のみの変動として見える>



***電離層を豎琴の弦と類似してみよう。



焦点照射の方法：

ビ-ム波アンテナ=位相整列アンテナ=豎琴ハ-プ。

送信機単位=名弦の振動開始時間をうまく設定して**アルペジオ演奏**すると一定方向への電波放射が可能<**ビ-ム波アンテナ**>.

電離層自身も豎琴になる、地震震源探索のビ-ム走査波アンテナになる。そのビ-ム方向制御は「結果出力を監視しながら入力操作の負帰還」で計算制御するのでは

*ヨハネ黙示録 15 章 2：またわたしは火の混じったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに獣とその像とその名の数字とに打ち勝った人々が神の豎琴を手にしてたっているのを見た。

[4]：VHF横波電磁波相互作用<HAARPで可能な物理現象要素>。

「細かい一般論を言えば**光子-電子**相互作用」。

$H_1 = jA$ VHF横波電磁波**A**(超長波**光子**)と**電子**電流密度**j**相互作用。

(1)電離層電荷振動と縦波電荷密度波の放射励起<震源層触媒破壊の地震兵器>

$E_t = -\partial_t A$. 横波電磁波電界**E_t**での**電荷駆動力** $f = eE_t$ <**プラズマ振動**>.

(2)導体照射での電界電流誘導<VHF波アンテナ受信電力>.

電流 j 誘導！

(3)気候要素との相互作用可能性???

(a)高層電離層現象(50~500Km)が対流圏(11Km)に影響するとは見れない。

電離層を太陽可視光線通過と冷却放射赤外線通過があるが、電離層がアルベドや温室効果に寄与とは聞いた事がない。

(b)大気成分とVHF横波電磁波相互作用が天候影響現象になるとは見えない。

電流 **j** がない

(c)大気中水分とVHF横波電磁波の強い相互作用がなるとは見えない。

電流 **j** がない

[5] : 電荷密度波にできる事<電荷密度波相互作用>。

物理原理は以下。N. Tesla の仕事、スカラ-波技術は大学工学部講座にはない。

<http://www.777true.net/BWG.pdf>

理論的に電荷密度波は一般商用通信等に利用される横波電磁波と並行する Maxwell 電磁式。

□ $\mathbf{A} = -\mu \mathbf{j}$. <横波電磁波 **A波**は電流密度 \mathbf{j} 駆動で放射される波動方程式>

□ $\phi = -q / \epsilon$. <電荷密度 q 振動で駆動される縦波**電荷密度波**(スカラ-波) ϕ >

(1)容量性インピダンスアンテナから放射されるので原理上、放射電力が無用になる。

*横波電磁波 **A波**アンテナ入力インピダンスは**放射抵抗**で有限な放射電力が必要。

(2)それで居て電荷密度波自身は正の電力密度を有する<**正エネルギー創始出力**が可能!!>

電荷密度波自身は正の電力密度 = $\rho^B \phi \geq 0$

-Pure Scalar Field Hamiltonian $\equiv \mathcal{H}_S$ -:

$$\mathcal{H}_S = -\frac{1}{2} \alpha \mathbf{B} \cdot \mathbf{B} + \frac{1}{2} \mathbf{E} \cdot \mathbf{D} + \rho^B \phi - \mathbf{E}_1 \cdot \mathbf{D}_1 = -(\epsilon / 2c^2) (\partial_t \phi)^2 - \frac{1}{2} \mathbf{E}_1 \cdot \mathbf{D}_1 + \rho^B \phi.$$

(3)宇宙全体でのエネルギー保存法則の厳守：縦波**引力場**は**負エネルギー**になる!!!。

0 = 重力引力場負エネ + 物質正エネ。

$$0 = -(\epsilon / 2c^2) (\partial_t \phi)^2 - \frac{1}{2} \mathbf{E}_1 \cdot \mathbf{D}_1 + \rho^B \phi.$$

0 = <<静電引力場負エネ>> + <<正エネ>>

(4)縦波電磁引力場は大元の**縦波量子重力**引力場の一成分<統一場重力引力場の吸収>。

特殊相対論から $\Delta E = (\Delta m)c^2$. 正エネ増 ΔE は質量増 Δm に等価、質量増は万有引力増になる。引力は負エネルギー。

(5)電荷密度波の場は**触媒空間**でもあるから、物質崩壊作用(Coulomb implosion).

HARRP 地震兵器の原理 = 震源層の化学結合破壊で地震引き金。

***電荷密度波出力計算**<x 軸方向伝播平面波を仮定, **小出力!**、**だが電荷密度は大!**>:

$$\phi = \phi_0 \exp(j\omega t - kx), \quad *k = 2\pi / \lambda = \omega / c, \quad \omega = 2\pi f, \quad \text{curl} \mathbf{H} = \mathbf{j} + \mathbf{j}^B + \partial_t \mathbf{D}.$$

$$\mathbf{E}_x = -\text{grad} \phi = jk \phi, \quad \mathbf{D}_x = \epsilon \mathbf{E}_x = j \epsilon k \phi.$$

$$\mathbf{j}_x^B = -\partial_t \mathbf{D}_x = \epsilon k \omega \phi = (\epsilon / c) \omega^2 \phi = \epsilon_r^{3/2} (\epsilon_0 / c_0) \omega^2 \phi. \quad \langle 0 = \mathbf{j}^B + \partial_t \mathbf{D} \rangle$$

$$W_x^B = \mathbf{j}_x^B \phi = \epsilon_r^{3/2} (\epsilon_0 / c_0) \omega^2 \phi^2. \quad \epsilon_0 / c_0 = 8.85 \times 10^{-12} (\text{F/m}) / 3 \times 10^8 \text{m/s} = 2.95 \times 10^{-20}; \quad \epsilon_r = 1.$$

$W_x^B = \mathbf{j}_x^B \phi$	$\phi = 1\text{V}$	$\phi = 10\text{V}$	$\phi = 100\text{V}$
f=10MHz	$1.2 \times 10^{-4}\text{W}$	0.012W	1.2w
f=100MHz	0.012W	1.2W	120W/m²
f=1GHz	1.2W	120W/m² .	12000W

☞ : 実現できる最大値電力流としては $\epsilon_r = 1$ (空中)、**120W/m²**.

120W/m² = 100V x 1.2A とすれば **1.2A = 1.2C/sec.m²**. だから電荷密度としては大きい。